

新しい季節の始まり、特に春はよい作品が多いです。言葉からも命の芽吹きを感じます。しかし、「春」という単語が目立ちました。「悲しい」と言わずに悲しみを、「幸福」と言わず満たされた心で見える世界を描くように、「春」を使わず春の鮮やかさや風や陽の光を感じられる作品がもっと増えるとよいなと感じます。

枯野ゆく槍持つように傘持って

長谷川柊香 宮城県

→槍は戦いに使われていたものだが、現代には槍などよりずっと強い武器があふれていてどんなに強い心を持ち戦っても簡単に薙ぎ払われてしまう。戦時中、アメリカ兵を倒すために竹槍で戦う訓練を受けた日本人の心には、たとえまやかしであっても手に持つ武器が真に強いものであった。作者にとってもそうで、傘を槍のように持ち心の拠り所にしてこの世に立つ。生きることは戦いであるから。

ぬりたての絵は

はらわたのいろをして

生きる は いつも 戦争だった

さいう 愛知県

→乾く前の色料に触れてはならない。触れてしまえば絵の状態は変わり、美しかった色料も濁った汚れとなって指につく。作者は絵の具が濡れて光を受ける様をはらわたのようだと感じる。美しさの中にある修羅、命の中にある死。戦争のように何かを破壊しながら生きる私たちの存在を思う。また、ひらがなと漢字の比率が一枚の絵の中に触れてしまったあとの濁りのようで美しい。

埋めた場所を

忘れるために

埋める人

立花ばとん 東京都

→たったひとつの後悔でさえ人を狂わせる。たったひとつだから狂っていくのかもしれない。新しい何かを埋め続ける、意識を分散させるための行動が心の重荷を増やしてゆく。人生は向き合うことでしか解放されない。意味を畳みかけるような言葉の繰り返しに自ら逃げ場を失っていくのが伝わる。

しよりしよりと

林檎をする、する、

平日昼間の父の物音

つばき 終 山口県

→平日の昼間にいる父親。主夫か、休日または休職中かなどの情報は描かれていないが、その時間に「父」がいることを強烈に意識している作者。しかし聞こえてくるのは会話はおろか呼吸や動作音でさえなく、林檎をする静かな音のみ。家にいることで薄まっていく父親の存在感が、淡い音から読み取れる。

珈琲の表面で

揺れるシャンソン

佐藤潤華 神奈川県

→時に大人は、孤独を哀しみながら楽しむ。喫茶店でひとり、寂しさと珈琲の苦みを味わう作者。ひとくち飲んだあと、珈琲の表面には照明のほのかな光や自身の頬の影が映るが、作者はそこに音楽を感じた。視覚や味覚からもシャンソンを味わっている。作品に登場するのは「珈琲」と「シャンソン」のみだが、匂い立つように情景が浮かび上がる。

常識を崩す力でほどく髪

五味 はこ 神奈川県

→髪が肩より長い人は結ぶように。学校でも職場でも、言われたことのある人は多いだろう。「常識」は時に、弱い立場の人間を強制的に従わせる便利な言葉である。あるがままの心で生きたい、風に吹かれるまま髪を揺らしたい。ゴムで縛られていた髪の毛や「常識」に閉じ込められる作者の憤りが、力強くほどかれた瞬間に開放される。

花 そういふ風に出来ている此世

鈴木 勝也 京都府

→この世に“在る”ものをあるがままに感じ取る。「そういう風に出来ている」とは一見大づかみであるが、人や鳥、花などすべてのかたちに意味があり、生き方に意味があることをその輪の一部になって感じている。「共鳴するなにか椿のぼとり」「垂直に立つ貴方 冬を剥ぐ人」など、情景からこの世の心理に触れる作風である。今後も読んでいきたい。

シャンプーは転生をする

春だった、

あなたに声を掛けられたのは

からすまぁ 神奈川県

→記憶のなかで匂いの持つ力は大きい。街ですれ違った人が「あなた」の使っていたシャンプーと同じ匂いがしたのか、薬局で同じシャンプーが売られていたのか、とにかくあなたとの思い出と繋がった。しかし作者が転生したと感じたのは、匂いでも「あなた」への想いでもなく作者とはやや距離がある「シャンプー」。しかしその「シャンプー」でさえ「あなた」が使っていたそのものではない。たった一人で向き合う思い出。